様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３０３７

研究課題名（和文）19-20世紀転換期における英米文学と宗教・スピリチュアリズムとの交流

研究課題名（英文）A Study of Religion and Spiritualism in English and American Literature at the Turn of the 20th Century

研究代表者
宮澤　優樹（Miyazawa, Yuki）

金沢大学・歴史言語文化学系・講師

研究者番号：００８４６８００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、米国の知識人階級に属する作家であったヘンリー・ジェイムズやイーディス・ウォートンの作品に見られる宗教やスピリチュアリズムについて検討した。その結果として、それらに関する問題や関心が、作家を含む世紀転換期における知識人階級にある程度共通する問題であることを確認し、さらにそれらが、ジェイムズやウォートンらの作品に幅広く表現されていることを見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した英米の知識人作家たち（特にヘンリー・ジェイムズやイーディス・ウォートン）の作品において、宗教やスピリチュアリズムに関する問題の重要性を明らかにした。これらは同時代の思想家や文化人も重要視した問題であり、両者の相互関係が作品を変容させていったことを、そうした作家たちの作品から確認した。こうした成果は、文学や宗教の扱う問題に共通性があることを再認識させるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examined issues and concerns relating to religion and spiritualism in the works of writers belonging to the American intellectual class, such as Henry James and Edith Wharton. The results of the analysis show that, to a certain extent, issues and concerns relating to religion and spiritualism were commonly found in the works of writers interested in contemporary intellectual movements at the turn of the century, as widely reflected in the works of James, Wharton, and several others.

研究分野：英米文学

キーワード：文学と宗教　スピリチュアリズム　世紀末文化　ヘンリー・ジェイムズ　イーディス・ウォートン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)作家と非合理性

ヘンリー・ジェイムズやイーディス・ウォートンら米国の知識人階級に属する作家による作品を理解するに当たり、宗教やスピリチュアリズムに関する同時代人による言説は、ジェイムズの『ねじの回転』（*The Turn of the Screw*）などの限られた作品に関する研究の場合を除き、作品の成立に関わる経緯として考察されることは、一部の研究に留まっていた。しかし、宗教やスピリチュアリズムを、人間精神の非合理的な部分や、理性によって十全に理解することに一見して困難が伴う部分を取り扱う思想とみなすなら、それは『ねじの回転』のような直接的に不可知なもの、あるいはそこにつきまとう曖昧さを扱う作品と関係するに留まるものではないであろう。したがって、本研究は、不可知なものに向き合うとき、作家はそれとどのように向き合ったのかという、なかばパラドキシカルな問いに根ざしつつ、宗教やスピリチュアリズムという具体性を持った思想を足がかりとして、そうした思想に親しんでいた英米の作家たちによる作品を検討することが可能であろうという目論見に端を発している。

(2)研究開始当初の見通し

上記のような研究を遂行するにあたり、本研究にとって重要な文献的基盤を提供してくれるものは、ジェイムズに対する作家研究における豊富な資料の存在と、そして伝記的研究の豊かな成果である。上述の『ねじの回転』は、「世紀末文化」とも称される 19 世紀末の文化的状況を背景とし、とりわけそこに見られるスピリチュアリズムとの関係が重要な背景のひとつであるとみなされてきた。研究開始当初の見通しは、こうした研究の成果を参照することにより、ジェイムズが、彼と交流のあった作家が、そして彼から影響を受けた作家が、スピリチュアリズムに対して抱いていた批評的な関心を理解することができるであろうというものであった。さらに、そのようなスピリチュアリズムに対する作家の関心を、宗教への関心と切り離して考えることはできない。この点に関しても、これまでの研究の積み重ねは多い。ジェイムズは、スウェーデンボルグの研究者であった父や、『宗教的経験の諸相』で知られる兄ウィリアムに対し、作品において彼なりの反応を描き込んでいた。さらに、彼と親しい作家であったウォートンもまた、伝統的な宗教といかにして向き合うかを、当時最新の思想を積極的に摂取するかたわら、作品を通して向き合っていたとみられる。文学作品と思想との交流を、宗教・スピリチュアリズムという観点から考察し直すことができそうである。さらに、そのような伝記的な事情を、そして、そうした文脈から作家を考察する研究の成果を、十分に踏まえることにより、直接は宗教やスピリチュアリズムを背景としない作品であっても、それらに対する作家の見方を読み取ることができそうである。

２．研究の目的

(1)宗教・スピリチュアリズムが文学作品へ与えた影響の解明

19 世紀末から 20 世紀へと移り変わる時代において、宗教やスピリチュアリズムは、一定の文化的インパクトを持っていた。それに関連する思想や言説を、それらに触れる機会の多かった知識人階級に属する作家は、いかなる批評性を持って観察していたのか。そしてそのような批評性がいかにして作品に反映されているのか。文学作品と思想との交流を考察することを通し、それらについて実証的に解明することが本研究の目的である。

(2)重要性や意義

本研究の持つ意義は、宗教やスピリチュアリズムに関係する思想が、ジェイムズやウォートンら知識人階級に属する作家たちの作品を理解するにあたり、重要な意味を持つことを示すことである。このとき、『ねじの回転』のような、これまでにも同様の関心から論じられてきた作品について新たな見方を示すに留まらず、他の作品、すなわち一見して宗教やスピリチュアリズムとは縁遠い作品（例えば、ジェイムズの場合は芸術を題材とした作品、ウォートンの場合はニューイングランドの貧困層の暮らしを題材とした作品など）においても、そうした観点から理解することも可能であろう。言い換えれば、宗教やスピリチュアリズムがもつ、作家たちにとってこれまでの研究が示してきた以上の重要性を示すことができる。

さらに、作家たちが宗教やスピリチュアリズムを作品に描き込むとき、それは単なる受容に留まるものではない。そこには一定の批評性が伴うものであり、さらには思想家の考えとは異なるような、作家独自の見方が示されているはずである。そうした見方が思想の側へと与えた影響についても、ウィリアム・ジェイムズを中心に検討することになる。また、本研究の目的は、そうした個別の作家による見方をも考察し、その理解を通じて、これまでの研究がジェイムズやウォートンのような作家に対して示してきた見方を更新することでもある。

また、ジェイムズやウォートンの持っていた文化人との豊かな人間関係について考察することを通し、当時の文化人が持っていたネットワークの理解、さらには同様の関心を持っていた作家を見出すことにつながる。

３．研究の方法

本研究は、文学作品と思想との相互的な往来を研究対象とするため、研究対象とする時代（19-20 世紀転換期）の文化的動向を示す文献の調査、そして作家の伝記的な情報を示す文献の調査が中心的な方法となる。

なお、文献調査を行うにあたっては、米国に存在するヘンリー・ジェイムズやウィリアム・ジェイムズに関する文献を調査する予定であったが、COVID-19 のパンデミックにより、実施することができなかった。そのぶん、国内で収集可能な文献の調査を、当初の予定よりも幅広く行うことができた。

具体的な調査として、宗教やスピリチュアリズムに関連する思想の調査、それを踏まえたと思われる文学作品の分析と検討、そして思想家らによるジェイムズやウォートンによる作品への反応を調査した。『ねじの回転』等のスピリチュアリズムを踏まえたと思われる作品についての研究を踏まえたうえで、これまでそれらと関連づけられることの少なかった思想や文化的表現に関する調査を行い、さらに、それらを前提としながら、幅広くジェイムズやウォートンの作品について詳細な検討を行った。

４．研究成果

(1)ウォートンのニューイングランドを舞台とした作品における宗教的主題の解明

知識人階級に属する作家による作品が、同時代の思想との交流を通し、いかにして変容したのかについて検討することを目的のひとつとする本研究において、イーディス・ウォートンは先述の通り重要な研究対象の一人である。彼女は上流階級の恋愛等を題材とした作品を書いた一方、ニューイングランドの農村を舞台とした物語でも知られている。なかでも貧困な農場主の生活を描いた『イーサン・フロム』（*Ethan Frome*）は、現在においても英語圏でよく読まれている小説作品である。本研究においては、そのような英語圏の文化を理解するにあたって重要な作品を、宗教・スピリチュアリズムとの関連から理解できることを明らかにすることができた。

ウォートンの『イーサン・フロム』は、貧困やその他の抑圧的な状況によって選択肢を奪われた人物の苦難を描く物語である。彼の苦難は、執筆当時にウォートン自身が抱えていた困難が反映されたものであり、かつ、宗教的な意味合いをも暗示する苦難として作中において表現されている。さらに、そこに見られる表現は、作家の宗教やスピリチュアリズムに関係する思索が反映されたものとして理解することができる。そうした主題に関するウォートンの思索に、そして創作に影響を与え、ウォートンが独自の見方を加えたと思われる文献について、詳細を検討することができた。

(2)宗教・スピリチュアリズムと作家による芸術理解

ジェイムズやウォートンらは、文学だけではなく、視覚芸術に関する造詣が深く、それらについて独自の見方を示していたことで知られている。それらと、宗教やスピリチュアリズムに関係する彼らの思索との間に、相互的なやりとりが存在することを見出した。上述の『イーサン・フロム』においては、ニューイングランドにおける冬の風景が作品の重要な背景を形成しており、それは絵画的な表現と結びついている。このことは、作者の書簡からも確認することができる。さらに、ウォートンが参照したと思われる絵画は、苦難という宗教的な要素をも読み取りうる題材を描いていることについても、考察を加えることができた。

また、ジェイムズの芸術理解についても、宗教やスピリチュアリズムとの関連から読み直すことができるという見込みを抱くに至った。特に初期の『ロデリック・ハドソン』（*Roderick Hudson*）は、彫刻家を主人公とし、彼の創作に対する姿勢が重要な主題である。このような作品において、ジェイムズは物語の後半で、美学において重要な意義を持つ場所であるアルプスを舞台として採用する。ここで展開される主人公の苦難は、のちにジェイムズが宗教やスピリチュアリズムとの関連から作品に描き込む要素を先取したものであると言うことができそうである。

以上はいずれも、これまでに行われてきた作家研究に新たな視座を提供するものであり、さらに、宗教やスピリチュアリズムに関連する文脈が、世紀転換期の作家にとって持つ重要性を検討し直す可能性を持つものである。

これらの研究成果について、いくつかの学会において口頭発表を行った。得られたフィードバックを踏まえながら、今後はより幅広い研究へと発展させ、論文や書籍として国際的な場において発表してゆくことになる。本研究はそのための重要な基盤を提供することになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宮澤優樹
２．発表標題 互いを書くことによる交流：ジェイムズの"The Velvet Glove"とウォートンの"The Legend"をめぐって
３．学会等名 金沢大学英文学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮澤優樹
２．発表標題 Edith WhartonのEthan Fromeにおける曖昧性:Turnerの絵画を出発点に
３．学会等名 日本アメリカ文学会中部支部
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関